第３６号　（2020年夏）
編集・発行　千葉市動物公園ボランティアーズ

千葉市動物公園の見どころ7+（セブンプラス）

特集　しなやかな猛獣　チーター

この夏、ヨーロッパの３つの国から７頭のチーターが来園しました。どんな動物でしょうか。

生態

生息地はアフリカから西アジアにかけての熱帯草原地帯（サバンナ）。体長 105～152cm、尾長 51-87cm、体重 35-65kg、体は特有の黒い斑点でおおわれ、尾の先には黒い帯模様があり、先端は白くなっている個体が多い。生後３か月頃まで首から背中にかけて毛がたてがみのように伸びています。

狩りは主に日中行われます。同じネコ科のライオン等夜行性の肉食獣を避けるためと考えられ、目元から口にかけての黒い筋模様（ティアーズ・ライン）は日中のまぶしさを和らげる働きがあると言われます。ガゼル・インパラ・ノウサギ・鳥類のような中型から小型の動物を捕食します。主に単独で生活、子育てをしますが、オスの兄弟同士や親離れしたばかりのメスが数頭の群れを作ることがあります。

動物界のいだてん　スピードの秘密

最高時速 110～120km、走りだして３、４秒後には時速 100ｋｍに達するそうで、この加速力はレーシングカー並みです。その速さの秘密は一体どこに？

第一に、引き締まった体に長い脚と、発達した肩ともものの筋肉。加えて、小さな頭と柔軟な体、全てが速く走ることに適した構造をしています。長いしっぽは、急な方向転換をしても転ぶことがないように舵の役割をしています。また、ツメは一般のネコ科の動物とは異なり引っ込めることができず、スパイクシューズをはいたようで、つねに走り出す準備 OK の状態。

一方、長距離走は苦手で、全力疾走は 500mくらいまで、平均では 200m しかもちません。また、頭が小さいので、アゴの力が比較的弱く、獲物に噛みついてもすぐには命を奪えません。また、肉を噛みちぎれないので、少しずつ削ぎ取るしかありません。ライオンなどのライバルに見つかって獲物を横取りされることも多いのです。

保全状況

20 世紀初頭、世界で１０万頭いたチーターが現在約 7000 頭に減少したと言われています。大幅な減少の原因は　①チーターの獲物となる草食動物が人間の狩猟によって減少した　②生息地域に高速道路、建築物等が作られ、地域の分断によってチーターの獲物の狩りが困難になった　③交通事故　④毛皮目的の狩猟　⑤ペット目的の密猟（過去１０年間 1200 頭以上の幼いチーターが密輸され、８５％が移動中に死亡）　⑥地元酪農家が家畜保護のため射殺。　現在絶滅危惧種に指定され、保護の努力が進められています。

ようこそ、千葉市動物公園へ！

■チェコ・プラハ動物園より　オス３頭
フィン（Fin）
フロド（Frodo）
フラッシュ（Flash）
2018 年５月 14 日生まれの兄弟

■フランス・モンペリエ動物園より　メス２頭
アジャブ（Ajabu）　アイワ（Aywa）
2018 年５月 14 日生まれの姉妹

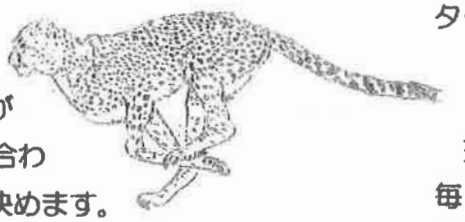
■ノルウェー・クリスチャンサン動物園よりメス２頭
ズーナ（Zuna）　ズラヤ（Zuraya）
2016 年５月 27 日生まれの姉妹

千葉市動物公園でのチーターの飼育　～ 飼育担当者にききました ～

〔チーターの日常〕

エサは１日に１回、およそ馬肉２kg　鶏頭 300ｇ　鶏ムネ肉 150ｇを与えます。週１回、絶食の日があります。

チーター舎には１頭１頭に個室があり、展示場には、普段はオスとメスを分けて交代で出します。オスの兄弟は３頭一緒に展示場に出します。メスは、フランスから来た姉妹はまだ２歳のため一緒に放飼することもありますが、ノルウェーからの姉妹は単独で生活をする４歳の大人であるため、繁殖を考慮し別々に飼育管理します。メスの発情に合わせて、今後、オスとミックスする予定です。



〔繁殖〕

チーターは選り好みがあるので、繁殖の組み合わせはお見合いの印象で決めます。第一印象で決まることが多いようです。

チーターには決まった繁殖期というものはなく、季節とは関係のない通年繁殖です。繁殖可能な年齢（性成熟）はオスメスとも２才で、安定してくるのはオスは２才、メスは３～４才と言われています。なお、寿命は平均１２年ですが、１６年生きた例もあります。

〔チーターラン〕

当園のチーターランコースは周回１４０m（直線６０m）で、チーターの運動能力を発揮させる周回コースに、ルアー装置を用いて疑似餌を追いかけさせ走る姿を来園者にご覧いただきます。

これは単なる「アトラクション」としてだけでなく、チーターの健康管理や繁殖のためにも役立ちます。行動エンリッチメント、すなわち動物への環境改善となり、チーターランを行うことで繁殖していなかった個体に繁殖が見られるようになるなど、効果が報告されています。

《飼育担当者から》

今回、世界各国の動物園から千葉市動物公園にチーターがやってきてくれました。その各国の多くの方々の想いを受け、当園でチーターの魅力をたくさんの方にお伝えできるよう取り組んでいきます。

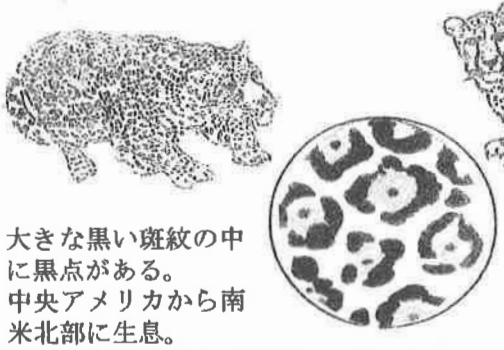
現在は、７頭のチーターとともに、お互い悪戦苦闘の毎日ですが、一日も早く分かり合い、より良い関係を築いていきたいです。そしてたくさんの子どもの誕生で、今度は千葉市動物公園から世界各国へ、絶滅の危機に瀕しているチーターを救う活動の一端を担うことができればうれしいです。

（中村彰宏）

中村さん　佐藤さん

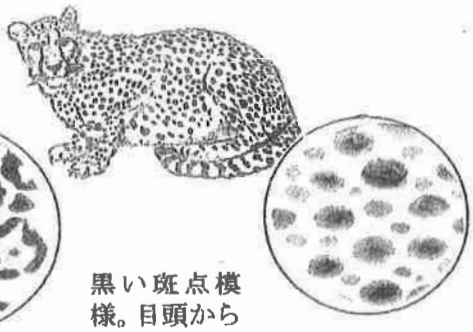
《　見分けられるかな？　ジャガー、チーター、ヒョウ　》

ジャガー　jaguar



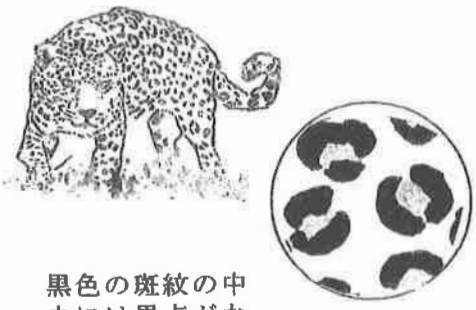
大きな黒い斑紋の中に黒点がある。
中央アメリカから南米北部に生息。
頭が大きく脚は太くて短い。がっしりした体型。トラ・ライオンに次いで３番目に大きい。夜行性。最も水に適応した野生ネコ。水のある場所を特に好むが、乾燥した森林や低木地を含めて、様々な環境に適応する。

チーター cheetah



黒い斑点模様。目頭から下へ、涙が流れた跡のような黒い筋がある。アフリカ、西アジアに生息。速く走るために体が軽量化されていて、頭が小さく、脚は細くて長い。スラリとした体型。昼行性。草原で身を隠し、抜群のスピードを活かして獲物を捕らえる。

ヒョウ　（豹）leopard



黒色の斑紋の中央には黒点がない。アフリカからアジアまで、ネコ科動物の中で最も広範囲に生息する。細身ながら筋肉質の引き締まった体型。夜行性。木登りが得意で、木の上にエサを運んで食べることもある。泳ぎもうまい。

第３７号　（2020 年冬～2021 年）
編集・発行　千葉市動物公園ボランティアーズ

千葉市動物公園の見どころ7 セブンプラス

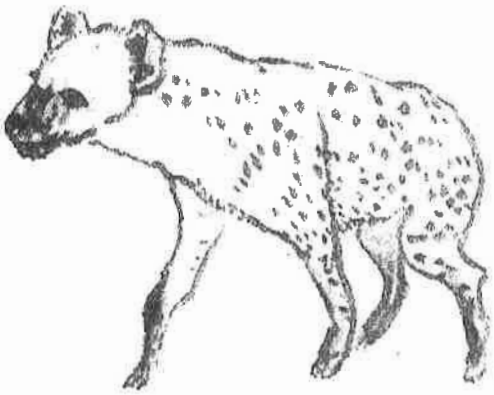
特集　意外にかわいい ブチハイエナ

2020 年、シンガポール動物園からはるばる千葉市にやってきたブチハイエナのイトゥバ。コロナ禍のトラブルのため、予定されていた他のハイエナの来園が遅れ、１頭だけの展示となりましたが、ハイエナの悪いイメージをくつがえす愛らしさで大人気となっています。

《　どういう動物か　》

一見するとイヌに似ていますが、イヌの仲間ではなく、食肉目ハイエナ科という独立した分類になっています。ハイエナ科にはブチハイエナ、シマハイエナ、カッショクハイエナ、アードウルフの４種があります。（ほかの３種については裏面に）

ブチハイエナは、体重 40－86 kgと、その中では最大種。サハラ砂漠などの一部地域を除き、アフリカ大陸に広く分布しています。骨をも砕く頑丈なアゴと歯により、噛む力はとても強く、肩回りが発達、それを支える前足が発達しているので、後ろ足が短くちょっと貧相に見えますが、噛みちぎるには都合の良い体型をしています。



寿命は野生下で 20 年位、飼育下 25 年くらいです。乳離れ後、狩りに参加し始め、オスは２～３年、メスは３～４年で繁殖年齢に達します。社会性に富む動物で、30～80 頭の群れを作り、それぞれの群れは生活の中心となる巣穴を持ちます。群れの頂点に立つのはメスのリーダー（アルファメス）で、序列がきびしく決まっています。また、メスの方がオスより一回り大きく、総じてオスは常に下位の存在です。

アルファメスの産んだ１番新しいメスが次のアルファを継ぐ決まりがあり、毎日順位確認のため、においを嗅ぎ、順位の低い者が後ろ足を上げて挨拶をします。捕らえた獲物は順位の高いメスから食べ、年上でもオスは最後になります。

《　食べ物を横取りするひきょう者？　》

アフリカの草原で、ライオンとともに肉食獣としてねらう獲物がほぼ同じため、両者はつねにライバル関係にあります。いつも獲物を横取りしているイメージが強いハイエナですが、実際は 60%以上自分たちで狩りをしています。時速 65 ㎞で走ることができる脚力とスタミナを持ち、忍耐強い頭脳プレーで獲物を捕らえます。

がんじょうなアゴと歯を持ち、噛む力は 320 ㎏。ライオンが食べ残す骨まで全部食べ尽くし、強力な胃酸で消化します。くさった肉を食べても強い酸で菌を殺してしまうため、具合が悪くはなりません。腐肉を食べるハゲワシ、フンをエサにするフンコロガシと共に、草原のおそうじ屋と呼ばれています。

《　鳴き声がブキミ？　》

人の笑い声に似た声で鳴きかわすことがあり、不吉な動物としていやがられたこともあるようですが、大きな群れを作るブチハイエナにとっては声によるコミュニケーションが欠かせず、12 種類の鳴き声を使い分けていると考えられています。笑い声に似た声もあることで「ワライハイエナ」と呼ばれることも。

飼育員さんによると、イトゥバは今のところ３種類くらいの声しか出していないようです。今後ハイエナの仲間が増えれば、もっと色々な声でおしゃべりしてくれるかもしれませんね。

《　性別不明のヘンな動物？　》

ブチハイエナのメスは、オスよりもからだが大きくオスとよく似た形の生殖器を持っています。そのため、見た目ではオスメスの区別がむずかしいです。昔の人

（表ページより）
は、雌雄同体の不気味な動物としてよく思わないこともあったようです。また、実際に、2014年に北海道の円山動物園で繁殖を試みていたブチハイエナが、両方ともオスだったという事例もあります。

メスは、この男性器のようなところから子を産みます。その出産は、とてつもなく難産です。細くて長い産道を通って生まれてくる子どもの6割は死産、2割の母ハイエナは初産のときに命を落とすそうです。こんな危険を冒してまで、なぜメスはオスのような外見をしているのか、くわしい理由はいまだわかっていません。

イトゥバ（Ituba）

プロフィルと当園での飼育

2016年11月17日シンガポール動物園で生まれる。メス
名前の意味は「チャンス」
体長約120㎝、
体重約65ｋｇ
エサ：1日あたり馬肉1.3ｋｇ　鶏頭1.3ｋｇ
たまに鶏頭の代わりに丸鶏を与える

3日に1回絶食日があります。（野生では毎日食餌をとっているわけではないので、自然に近いライフ・スタイルのほうが健康によいと考えられています。）

池に入るのが好きで、温泉につかっているみたいに池の中にすわって来園者を観察していることがよくあります。（ブチハイエナはみんな水に入るのは好きなようです。）

穴を掘る性質があるので、脱走できないよう展示場の地面の下には金網が張りめぐらされています。

「性格は意外と神経質で臆病。人の性別をわかっているらしく、女性よりも男性に対してきびしい態度をとります。」
（飼育員さん談）

（当園の飼育担当者）

中村さん　佐藤さん

ハイエナの仲間たち
（当園では飼育していません）

■シマハイエナ

（別名タテガミイヌ）
体長100～120㎝　体重37～55㎏
分布：アジア～アフリカ北部。　準絶滅危惧種。

ブチハイエナと毛色は似ているが、背中に黒いタテガミを持ち、胴体と足に黒色の縞模様がある。全身の毛を逆立てて体を大きく見せて、相手を威嚇する。

群れを作らず、オスとメスは繁殖期だけ一緒になる。

■カッショクハイエナ

（別名チャイロハイエナ）
体長110～140㎝　体重40～55㎏
分布：アフリカ南部

ハイエナの中では最も数が少なく、絶滅危惧種。

毛色は濃褐色だが首まわりは黄褐色をしている。足の毛も黄褐色で、黒色の横縞がある。長い体毛が胴体をおおっていて、危険を感じると全身の毛を逆立てて威嚇する。数頭の小さな群れで生活することが多い。

■アードウルフ

（別名ツチオオカミ）
体長55～80㎝　体重8～14㎏
分布：アフリカ東部と南部

毛色は灰色や黄褐色、赤褐色で、胴体と足に黒い縞模様がある。首から尾にかけて背中にタテガミ状に長い毛が伸びている。前足の指が5本（他のハイエナは前後足ともに指が4本）。昆虫食でシロアリを主食とし、一晩に20万匹食べるといわれている。

一夫一婦制で子と家族単位で生活している。

第38号（2021年春）

編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の見どころ7+

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください

①南アフリカから2頭が仲間入り
― ブチハイエナ ―

このたび、オスのカロア(2019年10月4日生れ)、メスのエサンドワ（2018年12月27日生れ）がやってきて、先に来園していたメスのイトゥバ（2016年11月17日生れ）と合わせて３頭になりました。それぞれに個性があり、見た目や性格が違います。カロアはまだ幼くて体が小さめの甘えん坊、エサンドワはがっしりした体つきで物怖じしない性格、イトゥバは意外と神経質で臆病です。顔立ちにも特徴があるので、よく観察してみてください。

野生のブチハイエナはクランと呼ばれるメスを中心とした群れで暮らします。

当園の３頭はそれぞれ違う群れの出身で一緒にすることがむずかしく、しばらくは１頭ずつ交代で展示されますが適齢期がくれば赤ちゃんが期待できるかもしれません。

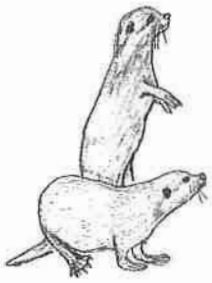
カロア

②地下に広がるマイホーム
― オグロプレーリードッグ ―

北米の草原地帯（プレーリー）に穴を掘り、群れで暮らすリスの仲間。体長30～40cm、体重１kg位、ずんぐりとした体型です。寿命は野生下で６年、飼育下で10年程度。オス１頭にメス数頭の一夫多妻の家族で暮らし、大きな群れはプレーリータウンと呼ばれます。天敵のコヨーテやタカ、ヘビなどが近づくと「キャンキャン」という犬のような警戒音を出すことからこの名前がつきました。巣穴は地中2～3mの深さで複雑につながっており、部屋には草が敷き詰められています。巣穴の入り口は雨でも水が入ってこないように盛り上っており、周辺に山のような見張り台を作り、歩哨のように見張りをする習性があります。イネ科の草を主食とする草食です。

③会いに来てね　新顔3兄弟
― コツメカワウソ ―

昨年、埼玉県智光山公園からやって来ました。2017年生まれのイチは１番大きくて顔に白い部分が多い、ちょっとリーダー格。2018年生まれの弟たちは、２番目に大きくて口の辺りに黒い模様があるのがココロ。体が細く顔に黒い部分が多いのがコロン。今は新しい環境に慣れるため、いっぱい遊んで食べて寝て過ごしています。草むらがお気に入りで、隠れ家にしたり隠したエサを食べたり。コツメカワウソは声でコミュニケーションを取るのが得意なので、ワカサギのオヤツをもらえる時は後足立ちしてニャーニャー鳴いて飼育員さんに猛烈アピール。水かきとしっぽを上手に使ってスイスイ泳ぎ、陸に上がると麻袋や丸太・草などに身体をこすりつけて乾かす姿もお見逃しなく！



④県内にも生息している
― カヤネズミ ―

イネやススキのようなイネ科の植物を「カヤ」と呼びます。そんなカヤの草むらにいるカヤネズミは、日本に生息する１番小さなネズミです。体は大人の親指位、重さも500円玉１枚位（7～8g）しかありません。長い尾を葉に器用に巻きつけ身軽に移動し、草の上に巣を作ります。巣の形はいろいろで、出産子育ての時には10㎝程のボール状の巣（カヤ玉）を作ります。

これまで穀物を食い荒らす害獣と思われてきましたが、最近の研究で稲はほとんど食べず、田んぼの雑草やバッタを食べていることが分かりました。ずっと人に誤解されながらも健気に共存してきたカヤネズミ。最近は見かけることがむずかしくなっています。ぜひ、こども動物園の飼育センターでご覧ください。

⑤小鳥のようにさえずる　小さなサル
― ワタボウシタマリン ―
（別名　ワタボウシパンシェ）

頭に植物の綿帽子をかぶった様子からこの名前がつきました。中央アメリカのコロンビア北西部の熱帯雨林で、4～20 頭の群れで木の上で生活しています。高音で多彩な声で鳴き、野生では果実、葉、芽、樹液、昆虫、小動物等を食べます。体長 21～29 ㎝、体重 350～600 g。赤ちゃんが生まれると両親が育て、兄や姉も手伝います。平均寿命は 15 歳位。天敵はフクロウ、タカ、ヘビです。

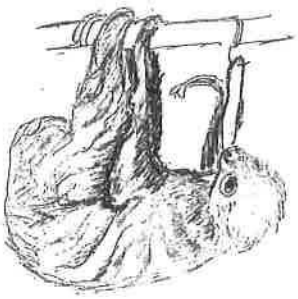
当園の展示の 2 頭は、オスが 2010 年生まれ、メスが 2016 年生まれ。枝から枝へ飛び移り、こちらをのぞき込んで首をかしげる姿が魅力です。

生息地が開発により破壊されて数が激減し、絶滅危惧種に指定されています。

⑥目立たないのが安全の秘訣
― フタユビナマケモノ ―

当園にはメス３頭、オス１頭のナマケモノがいます。夜行性で、バードホールでは木に隠れて見つけるのがむずかしいですが、１日１度のスコールの時間にはぬれるのを嫌って動き回るので発見のチャンス。「動けば見つかる」ということがよくわかります。

敵と戦う武器を持たないナマケモノは、中南米の熱帯林で、ワシやジャガーなどの天敵に見つからないよう、なるべく動かず風景に溶け込むように暮らしています。前後の足のツメを木に引っかけ脱力して過ごす独特のライフスタイル。毛はコケが生えやすい構造になっていて、体がうっすらと緑色になることもあります。



トイレは７～14 日に１回、地面に降りて用を足します。夜行性動物舎にいる１頭は近くで観察できます。

★バードホールでは屋内に雨を降らせる「スコール」を実施していますが、都合により中止することもあります。くわしくは１階インフォメーションでおたずねください。

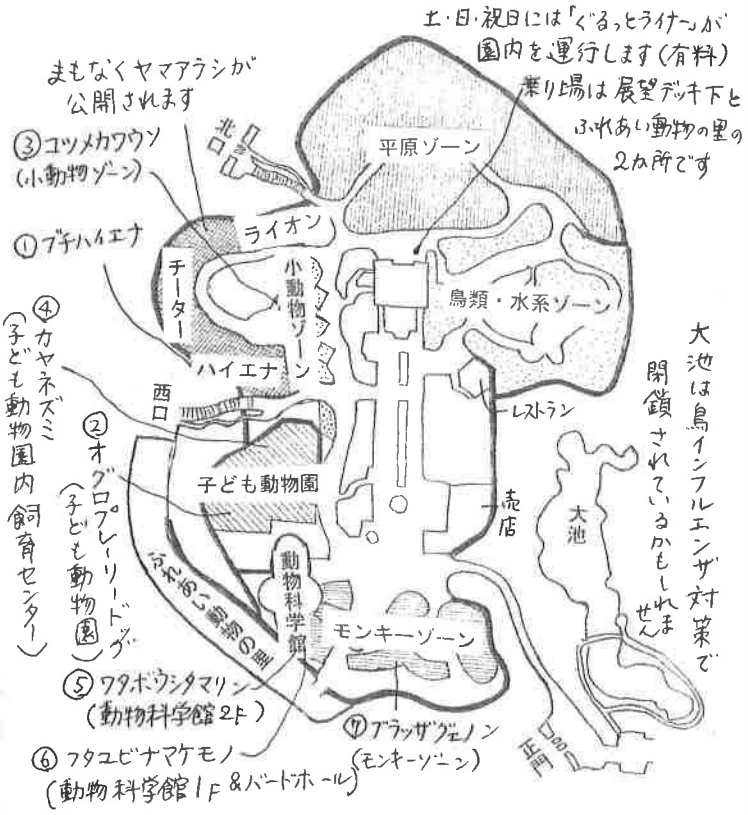
★それぞれの動物がいる場所は下の地図をごらんください

⑦ユニークなイケメンザル
― ブラッザグェノン ―

角刈り頭にオレンジ色の額、白いアゴヒゲが印象的なブラッザグェノンは、コントラストの美しいサル。アフリカの熱帯雨林の森や水辺に住み、サルにはめずらしく水に入るのも平気で、泳ぐこともあるそうです。リーダーのオスを中心に複数のオス、メスで４～10 頭位の群れを作ります。

野生では果実や昆虫、園では好きなリンゴ、バナナ等の果実、煮サツマイモ、ニンジン等の野菜、ゆで卵やミルワームも食べます。

上品で静かな印象ですが、あくびをした時に見える鋭い犬歯は迫力満点、。2020 年に来園したオスのユッケ４才は、メスのマドカ７才に遠慮気味でしたが、今ではエサも先に取りに行く頼もしいパートナーになり、２頭で仲良く動き回る姿が見られます。



★夜行性動物舎は昼夜逆転しています

動物科学館１階の夜行性動物舎では、動物たちの夜の行動が見られるよう早朝に照明を消して月明かりくらいの暗さにしています。昼間の様子を見たい方は、午後３時 40 分ごろに明るくなりますからその後で行ってみてください。

第３９号（２０２１年夏）

編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の見どころ7 セブンプラス

特集 アフリカタテガミヤマアラシ

５月27日に、２頭のアフリカタテガミヤマアラシが平原ゾーンで公開されました。両方ともメスで、名前はミクニとホルン。独特の鋭いトゲで武装しているものの、性格はおだやか。かわいがってくださいね。

はじめまして。どうぞよろしく

ミクニとホルンは父親が同じ異母姉妹で、東武動物公園から来ました。名前の由来は山の名前だそうで、ミクニは三国山、ホルンはマッターホルン。マッターという名前の兄弟もいるそうです。

ミクニは、2014年5月30日生まれ。好奇心旺盛(おうせい)の物怖(ものお)じしない性格で、体重は14.7㎏（3月30日計測）。ホルンは、2015年5月14日生まれ。人見知りで引っ込み思案なところがあるけれど、慣れれば活動的になります。体重は15.2㎏で、２頭の体重は少ししか違いませんが一見するとホルンのほうがだいぶ大きく見えます。ミクニは着やせするタイプ？

どちらも人になついていて、飼育係さんを威嚇(いかく)したり攻撃したりすることはないそうです。

閉園時、個室に帰る時は飼育係さんがドアを開けると自分から中に入ります。１頭ずつの個室がありますが、ミクニとホルンは仲が良く、今は同じ部屋で一緒に暮らしています。夜行性なので、夜間は室内に置いてある枝木や牛骨（ハイエナのおこぼれ）をかじったりして動き回っているようです。

ミクニ　　ホルン

ミクニとホルンの１日

開園前の朝９時に飼育係さんがバックヤードの個室から屋外展示場へ、おやつのエサを少しずつ与えながら誘導します。

日中は２頭が寄り添って、出入り口付近で寝ていることが多いです。朝の開園直後と夕方は比較的動いている様子が見られるでしょう。展示場の池に入ることもあります。

ふだんは声を張り上げて鳴くということはありません。フガフガと鼻息の荒いような音を出します。

トゲは怒ったり、威嚇(いかく)したりするときに大きく広がり、まるでクジャクの羽根のよう。トゲがぶつかり合いシャラシャラと音をだすこともあります。

こんなものを食べています

エサは１日１回、夕方に与えます。

リンゴ、トマト、バナナ（少量）などの果物と、サツマイモ、トウモロコシ、ニンジン等生(なま)のままのかためのの野菜や木の枝葉です。ネズミの仲間なので歯が伸び続けるため、かたいものを食べさせていて、トウモロコシは芯(しん)まで食べます。

大好きなのはサツマイモで、輪切りにしたものを与えると前足ではさんで持ち、回しながらまわりの皮をぐるりとかじってむいて、中身を食べます。結局最後には皮も食べます。おいしいものは最後にとっておくのでしょうか。なぞです。

もっと知りたい！　ヤマアラシ

≪ヤマアラシとは≫

ほにゅう類げっ歯目（ネズミ目）の動物で、アフリカ・アジアにすむ「ヤマアラシ科」と南北アメリカにすむ「アメリカヤマアラシ科」があります。「ヤマアラシ科」は地上で暮らし、「アメリカヤマアラシ科」は樹上で暮らす動物で、この２つは全く別の種です。

千葉市動物公園のアフリカタテガミヤマアラシはヤマアラシ科で、仲間にはインドタテガミヤマアラシ、ケープタテガミヤマアラシ等がいます。今のところ絶滅の心配はないものの、森林が切り開かれるなどしてすみかを奪われ、生息数は減ってきているとも言われています。

≪自然界の
アフリカタテガミヤマアラシの暮らし≫

アフリカ中部～北部や南ヨーロッパのごく一部の森林・サバンナや乾燥した岩地などにいて、3,500m位までの高地にも姿を見せます。小さな群れで生活し、岩穴や、前足の爪で地面に掘った穴（十数メートルの例も）の中を巣にしています。夜行性で昼間は巣穴で休み、夕方から夜にかけ単独で出かけて嗅覚で食べ物を探し、ときには 15 ㎞も歩くことがあります。おもに果実・樹皮・球根・穀物などを食べ、まれに昆虫を捕ったり動物の骨や乾いた死肉を食べたりもします。

寿命は野生では 12～15 年、飼育下では 20 年位。一夫一婦で年１回 2～3 頭を出産、子育てはオスも手伝います。生まれたばかりの子どもには柔らかく短い白と黒の産毛が生えており、トゲは 10 日位で硬くなります。約２ケ月は母乳で育ち、1～2 年で親と同じくらいの大きさになります。

≪背中のトゲはダテじゃない。
ライオンもひるむ攻撃力≫

警戒心が強く気性の激しいヤマアラシは、ライオン・ヒョウなどの敵に出会うと、独特の針毛（トゲ）を逆立て、後ろ足を踏みならしてトゲとトゲをぶつけ合わせ、シャラシャラ・バサバサと大きな音を立て威嚇します。それでも退散しないと、尾の太いトゲを相手に向けて後ろ向きに突進。刺したトゲは根元から抜けて相手の体に残り、刺さると抜けにくい構造になっているため、ライオンやヒョウにトゲが刺さっている姿は多く目撃されています。

かたく先端の鋭い白と黒色のトゲは、人間の髪や爪と同じケラチンという成分が変化した筒状の軽いものです。長さ 10～40ｃm位で、その強さはダンボールやアルミ缶をも突き刺すほど。オスは求愛行動にも音をだします。トゲは抜けると生え替わり、１頭で約３万本生えています。普通の体毛しかない顔と頭、毛が生えていない腹が特に弱点で、敵にここを攻められると負けます。

≪ネズミのなかまの伸びる前歯≫

アフリカタテガミヤマアラシは体重 15～27 ㎏ 体長 60～90 ㎝　尾長 8～15 ㎝。噛む力が強く、歯は上下２本ずつ門歯（前歯）があり、げっ歯目の特徴として門歯が一生伸び続けるため、かたいものをかじってすり減らさなくてはなりません。

指は前足４本　後ろ足５本。エサを食べるときは前足でつかんだり押さえたりして口に運びます。歩くはやさは時速 20 ㎞くらい。後ろ向きでも機敏に動くことができます。

まちがえないでね！　ぜんぜんちがうよ！

ハリモグラ

ハリネズミ

第４０号（２０２３年夏）

編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の見どころ7 セブンプラス

ボランティアがえらんだ

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください

①動かない？アフリカの大きな鳥
― ハシビロコウ ―

野生では水辺でじっと動かず、魚を待ち伏せして捕まえます。長い４本指の足で湿地でも沈まず歩け、広げると２メートルにもなる翼で飛ぶこともできます。ほとんど鳴かず、代わりにおじぎやクラッタリング（くちばしをカタカタ鳴らす）でコミュニケーションをとります。当園のじっと（オス）としずか（メス）も、歩いたり、羽ばたくなどの動く様子が見られます。

まだナゾの多い鳥で、動物園での繁殖はむずかしく、国内でヒナが誕生したことはありませんが、唯一しずかは卵を産んだことがあります。残念ながら無精卵でしたが、今も巣をつくるなど、繁殖の希望はありそうです。

毎朝、部屋から放飼場に出てエサのコイをもらいます。丸のみにする姿が見られるかもしれません。

②個性ゆたかなカップル
― カリフォルニアアシカ―

メスのマリンはショウトレーニングを積んだ経験があり、とても従順。飼育係さんの指示に従って、実は握手や倒立も上手にできます。一方オスのチャイムは食いしん坊で遊び好き。投げてもらった魚を口でキャッチするのが上手で、高く投げるよう催促する仕草も見られ、成功して食べられるとご満悦です。

アシカは１回の息継ぎで１０分以上潜水でき、プールの中を気持ちよさそうに泳ぐ姿が見られます。時々水から頭を出して「ガウガウ」とうがいのような仕草をするのはオスのチャイム、「今日も絶好調！」と言っているかのようです。夜はプール横にある白く広い石のベッドで就寝します。夕方の閉園間近には、ベッドに仲良く並ぶ２頭の姿が見られるかもしれません。

③海の鳥を真水で育てるには…
― ケープペンギン ―

南アフリカ共和国、ナミビア共和国の沿岸部に生息しているアフリカ大陸で唯一のペンギン。野生では大集団で暮らします。

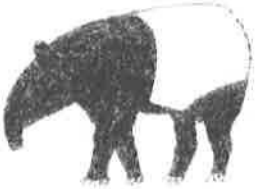
当園でのエサはアジやサバを１羽あたり１日に500ｇほど食べます。体重は3kgぐらいなのでかなりの大食漢。ペンギンは捕食のため海中に長くいることから、余分な塩分を排出する塩類腺をもっていますが、プールは井戸水でエサの魚も流水解凍の際に塩分が抜けてしまうので、ナトリウム欠乏症にならないよう、解凍後に再度塩水に漬けてから与えています。

飼育下の寿命は25年程度と言われていますが、１羽だけ、人工飼育されたためかんちゃんと名づけられ人慣れしたペンギンは今年33歳。元気に長生きしてほしいものです。

④大きな体に短いしっぽ
― マレーバク ―

マレー半島やスマトラ島などの水辺のある森に単独でくらし、泳ぎもうまく、天敵が来ると水の中に入ります。当園生れのユメタ(16才)は昨年３月に多摩動物公園より来園したカナエ(3才)と妊活中。妊娠期間は400日前後と長いので、うまくいっても赤ちゃんを見られるのはしばらく先になりそうです。

草や木の葉、くだものなどを一日に20kgほど食べます。鼻は上唇と一体となって、食べるときなどに自在に動きます。ゆっくり観察すると、意外に可愛い鳴き声を聞けることもあり、池に入って潜水するのを見られることもあります。オスはオシッコを後ろにスプレーして匂いづけします。森林開発などにより生息域が減少し、絶滅の危機にひんしています。



⑤当園のモモコが上野で活躍
― ニシゴリラ ―

当園のシンボルマークとなっているゴリラはアフリカ中部に生息する絶滅危惧種で、日本では6園20頭しか飼育されていません。上野動物園にいる千葉市所有のモモコがたくさんの子を出産し繁殖に貢献してくれています。

自然界ではオス中心の群れで暮し、胸を叩いて威嚇するドラミングはオスメス共やりますが、高齢になるとしなくなります。肌や毛が黒いのは紫外線の強い生息地の影響でメラニン色素によるもの。おとなのオスの頭頂部が長いのは頭蓋骨がとがっているからで、頭からあごにかけて筋肉がついており、噛む力が強く木の実や芋類など堅いものを食べるのに適しています。動物科学館2階に頭の骨格標本がありますのでごらんください。

体は大きいが肉は食べず、ほぼ完璧な草食です。園でのエサは野菜が主で果物は少なめ。ほかにキャベツをお皿に見立ててヨーグルトやゆで卵もたまに与えています。

⑥よろいを着た小さな動物
― ムツオビアルマジロ ―

アルマジロは主に南アメリカに生息していて20種ほどいます。背中のよろいの帯の数が種類ごとに違い、6本あるのがムツオビアルマジロです。

アルマジロというと丸くなり敵から身を守るイメージがありますが、完全に丸くなるのは2種だけで、ムツオビは丸くなることはなく、穴や茂みの中に逃げるので意外と素早く動き回ります。

硬い甲羅をよく見ると毛が生えています。その甲羅はチャランゴというギターのような楽器に使われることもあるそうです。

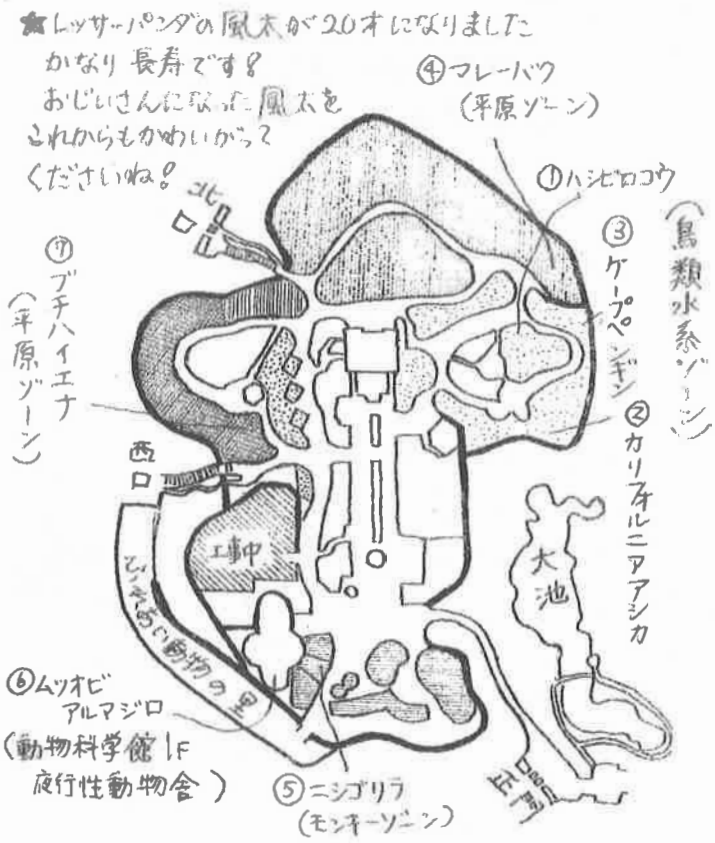
普段は展示場の土管の中で寝ていることが多いですが、いったん出てくるとガラスのそばを歩き回り、近くで見ることができます。よく見ると発見がたくさんあるムツオビアルマジロに会いに来てください。

★動物科学館1階の夜行性動物舎は昼夜が逆転しています
早朝に照明を落とし、閉園時刻の少し前から明るくなります。

★それぞれの動物がいる場所は下の地図をごらんください

⑦オスだと思ったらメスだった
― ブチハイエナ ―

2020年に南アフリカから来園した2頭は、オスのカロアとメスのエサンドワとして本紙38号でも紹介しました。先に来ていたメスのイトゥバとともに繁殖を目指しましたが、昨年、カロアもメスだとわかり、期待は1歩後退してしまいました。その経緯は…

2021年8月からイトゥバとカロアのペアリングの試みを始め、フェンス越しのお見合いや同居を8か月間にわたって繰返したものの、イトゥバがカロアを攻撃する事態が続き、繁殖につながる行動が見られなかったため、同性では？という疑問が浮かびました。そこで岐阜大学の協力でカロアの毛根細胞と口腔細胞のPCR検査を受けたところ、メスの可能性が高いことが判明。さらに北海道大学の協力で超音波検査を受けて、子宮と卵巣があることが確認されました。

体の構造が特殊で、外見からは性別が判定できないハイエナ。寒い日に池に飛び込んだり、下を向いて変な声で鳴いたり、その行動もフシギ感満載です。